| 日本キリスト改革派 **芦屋教会 月報** | 2025年1月号（No.443） |
| --- | --- |

## 巻頭言 「ワイエスの絵の向こう側」

**宇野 元**

アンドリュー・ワイエスの絵がいつも身近にあります。ワイエスに会いたかった青年が、ワイエス家ゆかりの美術館で買った小さな複製。白い世界の中に立つ人影。雪の日に画家が車で出かけようとしたとき、バックミラーに映った、数メートル後ろにいた妻を描いたものですが、距離感もあいまいになるような、隔絶の印象を受けます（「開拓地」1968年 テンペラ画）。

ワイエスの作風は緻密で、1970年代には、見えるものをまるで写真のように描くスーパーリアリズムの画家の一人として紹介されていました。絵画を学ぶ少年少女たちは、それらの画家の絵を特集する雑誌や画集を感嘆しつつ眺めたものです。しかし、ワイエスの絵画世界には、目に見えるものを超えるものが感じられます。そしてそれがなにか、見る者に考えるよう促してくれます。ワイエスの絵の不思議さがここにあります。

自然が内に秘める、人間が制御できない力。人間の内奥にひそむ、暗く重いもの。聖書が「罪」と名付けるもの。私たち自身が太刀打ちできないものがある。ワイエスが緻密に描く人物はそれを伝えているよう。そして、けれども、この不可解な、目に見えない暗い現実の実在感とともに、人物の輪郭を強烈な光が縁取ります。自らを担い切れない私たちを神の愛が包んでいるように。

「ワイエスの絵の向こう側」。ある日のこと。疲れた頭に、ふとこんな言葉が浮かびました。気分転換にとモダンジャズを聴き、居間のテーブルにある、ギレアド・シリーズのなかでもとりわけシリアスな一冊『Home』に目をとめたときに。

マリリン・ロビンソンの小説は、ワイエスの緻密な視覚作品が示唆するものを、おなじように緻密な言葉で表していると言えるでしょう。人間の隠れた内側の現実が、深く緻密に記される。濃い影と、それを包む強い光。この意味で、非常に聖書的な世界が創られています。自責の念。制御できない弱さ。すれちがう互いの心遣い……。悲観的結末のなかに、将来への希望をほのかに示すエピソードが加えられます。ほんとうにわずかな不確かなしるしに感じられる。そこに力強い言葉が置かれます。「主はすばらしい。」

神を讃える言葉が、どうして悲劇の最後に？　ワイエスの絵の向こう側。すばらしい小説であると認めながら、これまで違和感を禁じ得なかった最後の一文の意味が理解できたように思われました。